

# 病弱養護学校における 軽度発達障害のある情緒不安定な男子生徒への教育支援の検討

Support for a psychosomatic student with LD and ADHD  
by a special school teacher

土屋 恭子\*・坂本 裕\*\*

TUCHIYA Kyoko and SAKAMOTO Yutaka

## I はじめに

我が国の教育界においては、近年、高機能自閉症、LD、ADHDなどの軽度発達障害のある児童生徒に対する教育的関心が高まり、教育現場における支援の在り方が盛んに論議されている(文部科学省、2005)。軽度発達障害のある児童生徒の中には、二次障害として、生活面、また、学習面において困難を示すケースが多々あるとされている(不登校問題に関する調査研究協力者会議、2003., 杉山、2005)。こうした二次障害は本来ある機能低下や発達の遅れという障害から派生する種々の障害であり、知的障害が軽度であることが多い故に、不得意なことの無理強いや学習困難なために未学習・誤学習が長期的に連続することによるものと言われ、これらのことへの対応や支援の究明が求められている(坂本、2002)。

本報告においては、学校行事などでの集団活動に対して強い拒否の様子を見せる軽度発達障害のある情緒不安定な男子生徒に対し、病弱養護学校にて「学習課題の提示の仕方を配慮する」、「学習課題に本人の得意なことを取り入れる」、「多くの理解者を作る」といった3点に配慮しながら、1年間に渡って取り組んだ教育支援の経過を報告する。

## II 方法

### 1 対象児

A男 15歳 B病弱養護学校中学部3年  
障害名：非言語性学習障害 ADHD (C病院、D医師による診断)

家族構成：父、母、姉、妹

教育歴：E幼稚園、F小学校、J中学校(1年生1学期まで) B養護学校中学部(1年生2学期から)

治療歴：C病院小児科 カウンセリング(小2から現在も継続中)

### 2 実施期間

x年4月～x+1年3月

### 3 アセスメント

#### (1) 心理検査

x年4月時点では学校における心理検査の実施は困難であった。なお、x-1年10月にC病院で実施した結果は次のようであった。

- ・WISC-III：FIQ76 (VIQ83 PIQ72)
- ・YG性格検査：不安定・社会的不適応

#### (2) 行動観察(4, 5月)

新年度に入り、担任(第一筆者)も教科担当も新しくなった。以下は新年度当初4月の状況である。

新学期早々、遅刻をするものの生徒会の役員を自分から引き受ける。中学部3年生になり、新しい環境で自分の進路に向かって努力しようという意気込みがみられた。しかし、学力面に対する自信はあまりなさそうであった。不得意

\* 岐阜県立長良養護学校

\*\* 岐阜大学教育学部障害児教育講座

な教科は数学と英語とのことであり、自習や宿題などを一人ですることができなかった。生活の面では、遅刻をしたり、かばんを持ってこなかったりする様子もみられた。

4月下旬、遠足が近づくが、事前の取り組みは拒否し参加しない。A男の仕事分担は、他の生徒がほとんどやった。しかし、当日は本人なりに楽しんで参加した。学校全体の交流活動でゲームなどを行うと、参加を強く拒否する様子を見せた。

#### 4 支援仮説

A男は高校進学希望はあるものの、小学校および中学校における学校生活が順調でなかったこともあり、学習の習慣もなく、学力にはほとんど自信をもっていない。そのこともあってか、学校生活に不適応を示すような行動を取りがちになっているものと思われる。よって、A男が自ら教科学習に取り組むように、個人指導を中心とした具体的な学習の仕方を含めた支援を行う必要がある。

また、A男は学校行事などのような集団場面での人とのやりとりをするような行為が苦手であり、「めんどくさい。幼稚だ。つまらん。」などと自分なりの理由をつけ、勝手に休んだり早退してしまったりする様子もある。しかし、当日の活動には参加し、事前学習に参加しなかったことに対して後悔する様子も見られる。このことから、A男は人を拒絶するためよりも、多くの人にどのように対応してよいか分からないために集団場面を拒否しているものと思われる。よって、A男が集団活動の取り組みに少しでも自分で取り組んだという思いをもち、当日の活動にも参加しやすいような状況をつくるのが大切と考える。

#### 5 支援方針

- ・教科学習：落ち着いて取り組むことができるように個人指導の時間を設定する。あわせて、自分から取り組むことができるように、得意な教科や達成しやすい学習課題から始めるようにする。
- ・集団活動：A男が担当した役割は後一步で完

成するということまで級友と担任とで準備しておき、直前の活動に参加意欲を見せたときには一気に取り組ませたり、当日活動だけでも参加できるようにしたりすることから始め、他生徒や先生が自分のことを認めてくれているという思いをもったり、達成感を味わったりすることができるようにする。

### Ⅲ 結果

#### 1 第Ⅰ期：構築期（x年5月～7月）

##### (1) 基本的構え

##### ① 教科学習

学習の空白や遅進を少しでも取り戻し、本人の願いでもある進学が可能となるよう個人指導を中心として、教科では社会や理科などの得意な教科や運動面を伸ばすようにする。その上で、数学、英語などの苦手な教科は学習そのものに取り組む意欲が低いため、1時間の課題を明確に提示し、できたところ、分からないところを整理し、次の目標・課題をはっきりさせて次回の取り組みがスムーズにいくようにする。

##### ② 集団活動

宿泊学習など中学部全体で活動する集団活動に対しては、当日活動に参加ができ、集団場面で同級生などと触れ合うことができることを主な目的とする。そのため、A男に過重な役割分担や事前準備の段階で無理強いをして取り組ませるようなことはせず、行事直前でも済ませることができるような準備を担当するようにする。

##### (2) 経過

##### ① 教科学習

5月下旬になると、遅刻がたまにあるが生活態度も良く、授業は真面目に受ける様子が見られた。授業内容は学習空白や遅れを考慮し内容を簡単に整理して、1時間の課題を明示して内容が理解できるように工夫した。道徳や総合的な学習の時間などでは、A男の今の生活や学習上の悩みについて考えられるような題材を取りあげるようにした。しかし、6月中旬には、休日に遊び過ぎて翌日は遅刻したり、授業への出席を渋ったりするようになった。そこで、あまり学習に気乗りしない時は、パソコンを使用し

て学習を行ったり、できるだけ体を動かしてできる学習に切り替えたりするなど学習の取り組み方の工夫をした。また、友だち関係のことで不安定になると学習への取り組みも低下しがちであった。そのような時は無理に授業を受けさせようとするのではなく、担任がA男の話をじっくり聞いて、まずはA男の気持ちを整理するにした。このようにしたことで、自分から「次の授業は出る。」と言うことが何度もあった。学校の日課にそって行動することに対しても困難さを示した時には、進路に向けた学習の取り組みをすることを目標にして、学校で受けるべき授業については放課後にでも受けるようにした。放課後は時間的に余裕があるため、A男にはその方が負担がなかったようであった。

総合的な学習の時間には、乙武洋匡さんや大平光代さんの著書をとおして、その生き方を学ぶことにより、自分の生活や学習態度、進路に影響を受けたようである（乙武洋匡，1998.，大平光代，2000）。大平さんの自伝を読んだ時には、自分と比べて「自分がここまでくることができたのも学校のおかげだと思う。光代さんも大平さんのおかげで頑張ることができた。自分もこれから頑張って高校へ行きたいです。」と感想文を書いた。

6月になる頃には、遅刻や授業への出席渋りはあるものの、A男の話を時間をかけて聞いたり、得意なことを授業に取り入れるなどして授業を行ったりすることで、1日のうちの多くの授業を受けるようになった。そこで、学習空白のある部分を現在の学習内容に組み込みながら、A男が十分学習していない内容を補うような学習を行うこともできた。6月末には、中学1年生で養護学校に転校して以来、3年生になって初めて期末テストを受けることができた。

## ② 集団活動

6月末から中学部全体で臨海合宿の準備活動に取り組んだ。A男もいくつか役割を担当が、授業には出席できるのに、事前の準備の時間がくると早退したり、不機嫌になったりした。特にゲームの準備などを嫌がった。そこで、A男が担当した役割を担当を中心に完成直前まで準備しておき、行事直前か行事当日になって、A

男の行事への参加意欲が高まった時に一気に取り組むようにした。宿泊当日は遅刻もせずに参加することができた。全体会の司会や挨拶をしたり、ギター演奏も取り組めた。A男は自分の役割をこなして、全行程を楽しく過ごすことができた。そして、肢体不自由のある生徒や下級生の世話を自分からすることができた。

## (3) まとめ

第I期の学校生活への参加は前学年までと比べると概ね順調であった。生活全般が落ち着いていたこともあるが、個人指導、特に放課後に時間を取って行ったことがA男には特に効果があったと考える。また、A男の興味関心に基づいて学習意欲が出るように教科学習の工夫をしたり、体を使って行う活動を多く取り入れたりしたことも効果的であったと思う。そして、集団活動への参加ではA男には過多とまらない程度の役割や練習しなくてもできる役割を割り振って当日活動に参加しやすくすることも有効であったように思われる。

## 2 第II期：混乱期（8月～12月）

### (1) A男の状態

A男は一学期末から高校進学という希望を現実的なものとしてもつようになり、夏休み中も真面目に補習を受けた。そして、夏休み明けに業者主催の学力テストにも挑戦すると意気込んでいた。しかし、学力テストを受験してみると、5教科の内3教科受けて、会場から退席してしまった。本人によると、「周りの人がとてもしっかりしているように見え、すっかり自信を失ってしまった。」とのことであった。

9月からも第I期の支援方針を継続しようとしたが、A男は学力テスト受験を境に、一学期とは人が変わったように落ち着きなくなり、生活の乱れ、遅刻、授業渋りなどを繰り返すようになり、学校生活そのものにも影響するようになった。

### (2) 基本的構え

#### ① 教科学習

1時間の授業内容を精選して、個人指導を中心としながら、A男の気持ちを聞く、好きなこと、得意な内容を取り入れることなどに留意し、

学習課題ができたら学習時間を切り上げるなど負担のない学習時間にし、少しでも授業に取り組めるようにする。

## ② 集団活動

運動会での個人種目、修学旅行、学校祭、校外学習などの学校行事において、ギター演奏、体を使った作業的な学習内容などのできるだけA男の得意な分野を取り入れ、意欲的に取り組めるように工夫する。また、短い取り組み時間で達成でき、目に見えるように達成感が味わえるように配慮する。肢体不自由である級友に対しては穏やかに優しく接することができるので、その級友を援助する必要性が出てくるような場面設定を含んだ役割に取り組めるようにする。

## (3) 経過

### ① 教科学習

学力テストでの落ち込みに加え、これまで仲が良かった上級生との仲違いがあり、教師が第Ⅰ期のように学習に向いやすい環境づくりをしても、遅刻を繰り返したり、授業への出席を渋ったりするようになった。A男自身、日々の記録にも「学校で勉強することは大事なことと分かっているけど、イライラすると、勉強する意欲もなくなってしまふ。先生に何か言われそうなことも分かっている。」と書くなど、自分でも気持ちの整理がなかなかつかない様子がみられた。

このような状態にあるA男が学習に向うことができるようにするために、A男が比較的取り組みやすい体を動かしたり、作業的な内容を取り入れりした個人指導から始めるようにした。そして、A男の努力を担任だけでなく、他の先生にも認めてもらうようにした。このような配慮により、9月末には、A男はギターを弾くことを利用した学習活動や運動、教科学習においては作業的、体験的な活動を取り入れた学習活動などには少しずつ取り組むことができるようになった。

10月には1年生に転校生があり、指導者や学習グループの関係でA男と転校生とが一緒に学習することが多くなり、A男は個人指導の時間が減ってしまった。2人の授業においては複式で授業を受ける状況となり、不安定になる場面も見られるようになった。しかし、A男が得意

が調理実習などの学習活動では、転校生をリードして取り組むような状況も数多くあった。

## ② 集団活動

校外学習、運動会、修学旅行、学校祭と学校行事が連続し、これらのほとんどの学校行事において事前に「やる気ない。」とか「当日休む。」などと参加を渋って、練習や準備にはほとんど取り組まない状態が続いた。それでも体を動かすことが好きなこともあり、運動会は体育の男性教師が個人指導を行うようにしたことで、練習段階から参加することができた。

修学旅行や学校祭では、事前の練習がなくてもできる司会や挨拶やギター演奏の役割を振り分けた。そして、当日活動に参加できたことを喜び、担当したこれらの役割をやり遂げたことを認めるようにした。このことにより、当日活動は無理なく参加することができた。また、修学旅行の時は夜中眠らず肢体不自由のある生徒の体位交換を補助するなど、教師や友達を感心させるほどの姿をみせてくれた。

## (4) まとめ

業者テスト受験で自分の学力の厳しさに直面したことや、友達との仲違いや転校生の出現で不安定になることが多い第Ⅱ期であり、第Ⅰ期後半のような落ち着いた状態を取り戻すことは困難であった。しかし、A男が比較的取り組みやすい内容を取り入れた個人指導を設定し、その頑張りを多くの教師が認めることで少しずつではあるが教科学習にも向かうことができた。また、苦手な学校行事やその準備活動の参加も当日活動を中心に得意な活動を組むことで参加が可能となり、他を思い遣るような姿もみせてくれた。第Ⅲ期は卒業・進学を迎えることとなるので、A男が取り組みやすい状況を考慮し、これまで以上に迅速な対応をして必要があると考える。

## 3 第Ⅲ期：再構築期(x+1年1月～3月)

### (1) A男の状態

卒業・進学が目前になったためか、冬休み明け、A男は「学校へは行かない。勉強する意味が分からないから。」と欠席が5日間続いたので、家庭訪問をすぐに行った。その時のA男の

表情はとても穏やかだった。久しぶりに静かに話をすることができ、今後の学校生活のことや進路のことも話題にすることができた。さらに、父親を交えての話ができ、特別教室での個人指導から学校生活に参加することを約束してくれた。

## (2) 基本的構え

### ① 教科学習

第Ⅲ期は学習に向う姿勢を再度整え、生活全般においても安定して過ごすことができるように個人指導を行う。その中で、高校入試に向け、得意な社会や理科を中心に、受験に関わる小論文や面接の練習などを授業時間中に取り上げ、その目標に向かって努力できるようにする。また、学習課題は興味のあることや好きなことを取り入れ、1時間内でやりきれるような分量となるようにする。

### ② 集団活動

卒業式に参加するために当日の服装を自分で決めたり、式の時に読み上げる「別れの言葉」を教師と一緒に準備するなど、卒業生を送る会も含め、卒業に向けた取り組みに少しずつ参加できるようにする。

## (2) 経過

### ① 教科学習

1/17から1/24の8日間、朝から教育相談室で日課に沿って、個人指導を行った。この個人指導では体を動かすことやギターを弾くことなどを学習に取り入れたこともあり、複数の先生と勉強をしたり、話をしたりすることができた。こうした中で、A男は小論文の書き方や面接練習など具体的な高校入試に向けた取り組みにも学習に意欲を示し、「進学したい。高校でレスリングをしたい。」という具体的な目標を口にするようになった。そして、今まで自分から持ってくるのがなかった教科書や文房具も持って登校するようになり、遅刻する時には自分から学校に連絡を入れるようになった。さらに、1月下旬には通常の教室での授業に戻ることができた。

その後の生活も落ち着いており、みんなと掃除をやるようになったり、高校を見学に行ったり、先生に部活のことを聞いたり、受験の準備

にも積極的に取り組む様子がみられ、教室でも柔和な表情で過ごす姿がみられるようになった。しかし、高校見学後は、やや不安になったのか、少しばかり落ち着かない姿をみせた。そのため、受験当日までは、家庭にも協力してもらって、願書などの書類作成や写真準備に他の生徒よりも多くの時間を要しながら、願書をA男とともに作り上げた。このような取り組みもあってか、以前ほど生活のリズムがが大きく崩れるまでは至らなかった。

そして、予定どおり高校受験することができた。合格発表までは、結果が気になるのかしばらく落ち着きなかった。結果的には受験に失敗したが、そのことを意外に静かに落ち着いて受け止めることもできた。

高校進学は困難となったが、A男の保護者との個別面談を行い、就職をすることにした。就職についてはA男には告げてはいなかったが、冬休み明け直後から高校進学が困難な時のことも考え、保護者とは家庭訪問以降、適宜連絡を取り合い、具体的な就職先まで準備しておいた。休日が続く日などは父親の手伝いをするようにして、父親のそばでA男の成長を見守りながらできる仕事を父親と相談していた。そして、A男には以前から高校受験を失敗したときは自分の体力を活かした仕事で、父親のような仕事をするとよいことの助言もしていた。こうした事前の取り組みもあり、卒業後すぐに父親が見つけた職場に就職することができた。

### ② 集団活動

卒業生を送る会や卒業式の準備が連続したが、第Ⅱ期のような学校行事に対する拒否的な態度をみせることはなく、ガラス拭きや掃除をするなどにみんなと取り組むことができた。

卒業式には自分で決めたように学生服を着て、遅刻せず出席できた。そして、別れの言葉では先生方にお礼を言い、卒業の色紙には「3年間ろくでなしの僕を指導して下さった先生方ありがとうございました。」と記し、笑顔で卒業することができた。

#### IV まとめ

軽度発達障害のある情緒不安定な男子生徒への1年間に渡る教育支援の経過を報告した。以下、今回の教育支援で特に留意した「学習課題の提示の仕方を配慮すること」、「学習課題に本人の得意なことを取り入れること」、「多くの理解者を作ること」の3点から整理し、検討を加える。

##### 1 「学習課題の提示の仕方を配慮する」に関わって

A男は4月当初、集団活動への取り組みを渋り、教師が働きかけても「めんどくさい」、「幼稚だ」と返すばかりだった。これはA男が集団活動に対する取り組みの仕方が理解できていなかったことや学校行事などの集団活動の場面での人とのやりとりをする行為が苦手なためであると思われる。そのため、行事に対する準備段階からの取り組みをA男にとって過重になりすぎないようにし、多くの支援をしてわずかな取り組みができただけでも「取り組めた。参加できた。」こととして認めてきた。また、事前練習がなくとも行うことができるような役割をA男の役割としてたことは、学校行事の当日に参加し「できた。」という成就感を味わう切っ掛けになったと考える。このことから、教師が本人の取り組みたい課題や取り組める課題を、更に確実に達成・実現できるように工夫した上で提示することが肝要であることを痛感した。

##### 2 「学習課題に本人の得意なことを取り入れる」に関わって

本人の得意そうなことや興味のあることを学習課題に取り入れ、1時限の学習時間を短く区切って短時間のうちに課題に取り組めるようにするなどの工夫をし、集中して学習することができるようにした。このことを繰り返すことによって、A男が「大嫌いだった数学が嫌いになった。」と語っているように、少しずつ学習に対する自信や構えをもつことができたのではないと思われる。しかし、本事例の第Ⅱ期で見られたように、それまでの学習空白やそれによる

学習遅進を本人が認識できておらずに、その現実を受け止めることが困難な場合も生じる可能性が高い。そのため、石隈(1999)も指摘しているように、学力を保つことを早期から配慮することの重要性も痛感した。

##### 3 「多くの理解者を作る」に関わって

学習や集団活動に対する取り組みにおいても失敗体験の方が多いA男に対し、複数の教師による個人指導を基本とした。その中で、教師は当然できるだろうという先入観でA男に向かわず、過重な課題を与えず、できたことを確実に認め、励ますようにした。このような個人指導で、A男はひとつずつ達成できたことを多くの教師に認められていることを実感でき、卒業時の姿につながったものと思われる。

支援が必要な生徒への対応においては、その対応に当たる教師を特定して行うことで理解を深め、より適切な支援を的確に実施することが重要になる事例もある。しかし、本事例のように中学校段階に位置し数年後には実社会に行かなくてはならない生徒の場合には、複数の教師ができる限りの共通理解を図りながら支援を行うことで、より多くの人と触れあい、人の良さを体感できるような取り組みも重要になると考える。

付記 本報告は関係者の了解を得ている。

文献

不登校問題に関する調査研究協力者会議(2003) 今後の不登校への対応の在り方について(報告)。

石隈利紀(1999) 学校心理学。誠信書房。

文部科学省(2005) 平成16年度文部科学省白書。国立印刷局。

大平光代(2000) だから、あなたも生きぬいて。講談社。

乙武洋匡(1998) 五体不満足。講談社。

坂本 裕(2002) 子どもを理解する。発達の遅れと教育, 536, 24-26。

杉山登志郎(2005) 問題行動の克服と青年期の社会性の獲得のために。杉山登志郎(編著) アスペルガー症候群と高機能自閉症—青年期の社会性のために。学研, 6-41。